

少年消防クラブニュース

発行/ 財団法人 日本防火協会
 〒105-0001 東京都港区虎ノ門2-9-16
 (日本消防会館内)
 TEL 03(3591)7121
 FAX 03(3591)7130
 http://www.n-bouka.or.jp
 (季刊・年4回発行)

印刷/株式会社 近代消防社

少年消防クラブ 指導者研修会の開催概要

少年消防クラブ活性化推進会議

少年消防クラブ活性化推進会議(委員長・秋本敏文(日本防火協会会長・日本消防協会理事))では、去る6月4日(土)、5日(日)の2日間にわたり、平成23年度選定の全国33のモデル少年消防クラブの指導者を対象とした「少年消防クラブ指導者研修会」を開催しましたので、その概要を紹介いたします。

1日目

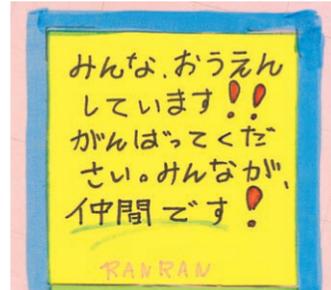
クラブ活動の情報交流

1日目は、東京都千代田区の会場で開催しました。秋本敏文委員長の主催者挨拶、総務省消防庁横田真二防災課長の来賓挨拶の後、クラブの活動状況や運営上の課題について情報交流が行われました。

1 基調報告

平成22年度選定のモデルクラブ指導者である、札幌市川沿少年消防クラブ指導部長山崎英雄氏及び福岡県おおのじょう少年消防クラブ運営委員会委員長上野修氏から、クラブの活動状況についてご報告をいただきました。その内容は、地元消防と消防団の協力により充実した訓練が行われていること、地域の理解を得るため広報に力を入れていること、防災行事には積極的に参加していることなどでした。

また、東日本大震災の被災地に向けて、川沿少年消防クラブでは応援メッセージを作成し(写真A・B)、お



(B) 応援メッセージ内の1点



(A) 応援メッセージ

2 DVD上映「ドイツの青少年消防隊」

少年消防クラブ活性化推進会議が、青少年消防の活動が盛んなドイツを現地調査し、その活動状況を収録したDVD「ドイツの青少年消防隊」を上映しました。ドイツの青少年消防隊の組織、活動内容、実践的な教育訓練の様子がお分かりいただけたいと思います。

3 意見交換会

前記の基調報告やDVDの内容を踏まえ、クラブ運営上の課題やクラブ活動の活性化方策について、参加者が2班に分かれて意見交換を行い、その後、各班で話し合われたクラブ運営上の課題について発表が行われました。ここで取り上げられたクラブ運営上の主な課題等は次のとおりです。

○活動計画、活動時間

年間の活動計画は、消防署の事務局と指導者の打合せで決定するクラブや学校と調整しPTAにも協力を求めるクラブがありました。また、活動計画の固定によるマンネリ化や中学、高校のクラブでは勉強、部活で活動時間の確保に苦労しているとの発言もありました。



○子供が興味を引く訓練等
 規律訓練のときに話を聞いてもらえないとの発言に、「10分位の短い区切りで話をすれば子供たちは飽きないで集中する」との経験を踏まえたアドバイスがありました。また、保護者が居ると叱れないし、(消防職員の)上司が叱らないと部下も叱ることが出来ないとの発言もありました。

調布消防少年団の規律訓練

○資格等について
 東京の消防少年団には資格ごとにバッジが



実技訓練に勢揃い

○実技訓練

救急訓練、ロープ結索訓練は、比較的多くのクラブにおいて行われていました。救急訓練で、中学生には普通救命講習(3時間)を受講させているクラブがありました。D級ポンプ訓練に関しては、今後の指導に力を入れたいとするクラブが数例あった他、将来は全国操法大会を行えば良いとの発言もありました。

○避難訓練等

東日本大震災の被災地より参加したクラブから「避難所体験を予定していたが、3月11日には体験になってしまった」との発言がありました。また、海に面した地域のクラブからは、保育園、小中学の全校が一歩高台の高校まで避難する訓練をしたとの報告がありました。地震が起きた年だけに関心を集めていました。

1泊の野外研修やキャンプ、はしご車搭乗体験、レスキュー隊の綱渡り見学は子供に喜ばれる訓練であるとのこと。また、レクリエーション的な要素として、ボーリング大会、クリスマス会、餅つき大会などを取り入れているクラブが多くありました。



D級ポンプ操法訓練

以上で、2日間にわたる研修会を終了しました。昨年に続き2回目となりましたが、今回は、消防少年団の訓練見学にD級ポンプ操法訓練を取り入れられました。適切な指導があれば、中学生にも実践的な訓練が可能であることを示してくれました。

2日目

実技指導研修

2日目は、会場を渋谷区の東京消防庁消防学校に移し、同行及び調布消防少年団のご協力によりクラブ員指導のための実技訓練を行いました。

1 消防少年団の訓練見学

平成23年度モデルクラブ選定の調布消防少年団の団員、小中学生19名による規

律訓練、D級ポンプ操法訓練(中学生のみ)を見学させていただきました。同消防少年団の指導者であり消防団員でもある馬部純一郎氏の指揮の下に行われた見事な展示に、参加者から大きな拍手が送られました。

2 参加者の実技訓練
 参加者を3班に分けて、規律訓練、ロープ結索訓練及びD級ポンプ操法訓練を順次体験していただきました。



指導者研修会に参加して

参加された2名の方から感想をお寄せいただきました。

指導力向上を目指して

三郷市少年消防クラブ 荻浦 正樹



今年4月に設立されたばかりの三郷市少年消防クラブ。当クラブの課題である指導者育成という命題を背負い、2日間の研修に臨みました。

クラブ員を育成する近道は、指導者の育成からとの考えを持ち、全国から集まるクラブ指導者の知識や技術を学ぼうと、まず指導経験者2名の基調報告に耳を傾けました。報告者からは、指導者をクラブ員の母親に願うこととの報告がありました。当クラブは市消防本部が公募で集めた市内の小学5・6年生を対象としており、指導者を育成者と称し、消防職員、保護者及びボランティアで構成しています。が、保護者の育成者登録が少なく、職員中心の指導が基本となっていました。私も、

練習を受けるためのヒントをいただき、2日目の実技研修を含め、とても有意義な研修会となりました。

今後の活動に活かしていきたい

荻窪消防少年団 村田 美菜子



私は今年の4月1日から荻窪消防少年団の担当となり、少年団の活動内容の方針や、他署の活動内容を勉強したく、今回の指導者研修会に参加いたしました。どのような内容なのか、そしてどんな方達が来るのか、

か、初めてでもあり分からずだったので、とても緊張していたように思います。初日に行われた、代表である少年消防クラブの基調報告では、それぞれに掲げている活動の意味、内容、活動するまでにいった経緯を聞きました。担当になって間もない私は、ただ前任であった人のマネをすることがとても多かったのですが、これからは活動の1日に目標を持って活動し

応援メッセージ



日本消防協会ならびに日本防火協会では、全国の少年消防クラブの活動や組織の活性化を推進するために、平成22年度からモデルクラブを選び、様々な支援策を行ってこられました。平成22年度には55クラブ、平成23年度には新たに33クラブが選定され、その活動を紹介します。少年消防クラブニュースを毎月拝見することが楽しみます。地域特性に応じた多様な取り組み、

地域で育てる少年消防クラブ

少年消防クラブ活性化推進会議専門委員 重川 希志依 (富士常葉大学大学院環境防災研究科教授)

の、日々のご努力も、誌面を通じて読みとる事ができるのです。しかし誰もが予想もしなかつた東日本大震災が発生し、モデルクラブとして選定された少年消防クラブの中には、津波に

私が勤務する大学には、消防士になりたいという希望を持って入学してくる学生が多く存在します。また、在学中に消防団に入り、学生団員として様々なことを先輩団員に教わり、将来に備え

た。とても内容の濃い時間だったと思います。2日目に行ったD級ポンプの操作訓練では、恥ずかしながらもD級ポンプを触るのは初めてであったため、1つ1つ指導いただきながら、学び、体験していき

少年消防クラブに参加し活動する子どもたちのべきだと思います。



ていくべきだと感じました。意見交換会では消防吏員ではなく消防団員をやって

おられる方や、消防少年団の指導員である方のお話を聞くことができました。正直に言うと、意見交換会と言っても、ただ自分達のしている事を伝えあうのではなく、お互いに自分自身の信念や教訓を交換しあいたい、自分達だけでは解決しづらいような問題を相談しあ

より大きな被害を受けた地域にあるクラブもありました。そのクラブ員の皆さん、そして日頃からクラブ活動に対して熱心に指導や支援をして下さっている皆様の、ご無事を祈りするばかりです。

中にも、将来消防士を目指す学生もいます。彼ら彼女らは心底「人の役に立ちたい、人の命を守りたい」と思い、消防士を目指しています。景気が低迷する昨今、公務員を希望する学生は増えていますが、よく言われるように「公務員は安定しているから」という志望理由の学生は皆無です。言葉で語ることは簡単ですが、東日本大震災で改めて、消防の仕事とは、常に命の危険と隣り合わせであることを実感することになりましたが、学生たちの消防士への夢はそれでも変わることは無いようです。

本校は、この度の東日本大震災で壊滅的な被害を受けた南三陸町立歌津中少年消防クラブ



第5号に続き、平成23年3月選定のモデル少年消防クラブを紹介いたします。なお、本紙の既刊号は、日本防火協会のホームページ(www.n-bouka.or.jp)からご覧いただくことができます。

けた南三陸町にあります。学区は漁業を主たる産業とする地域で、多くの生徒の居宅は、海岸線に沿って分布していました。昨年度、本校に在籍していた生徒の約7割が家屋の流出等の被害を受けました(本校生徒は、全員無事でした)。当地区の被害はほとんどが津波によるもので、地震の揺れによる被害はほとんど見られませんでした。その意味で、津災ヘンサインであったと考えています。このような状況の中、学校は、約1ヶ月遅れて5月10日に再開しました。現在も体育館は避難所となっています。大津波前から決まっていた歌津中学校の少年消防クラブの発足ですが、この状況下で発足式もまだという状況です。本校は、以前から1年生の総合的な学習の時間のテーマを「防災」とし、避難訓練や炊出し訓練、防災マップの作成などの学習を行っています。本校に入学すると同時に、地震や津波への対処法を学び、防災意識を高めてきました。このような活動を発展させたいと考えて、全校生徒の少年消防クラブへの加入を決めたのです。

指導者からの便り

地域の防災力

宮城県 南三陸町立歌津中少年消防クラブ

教諭 佐藤 公治



陸の孤島

この度の津災(シンサイ・津波による災害)を、私は勤務先で生徒たちとともに経験しました。私は、しばらくは生徒の安全確保や生徒を不安にさせないよう努めていきましたが、建物が根こそぎ流出し、がれきの山となった町や、国道に架かっている大きな橋が横倒しになっている姿を見て、人が造った建造物のもろさや自然の偉大さを感じるとともに、自分たちが移動できない状況にあることに気が付かされました。

陸の孤島と化し、電気も水道も途絶し、家族の安否を知るための携帯電話も不通となり、手回しのラジオから、仙台湾の荒浜周辺で2~300人の遺体が漂着していることを知り、ただそれだけで不安な思いにかられたものでした。生徒の保護者たちもほとんどが、自分の子どもを迎えに来る手段がなく、生徒のほぼ全員がその日、体育館に泊ま

とがつくる「地域力」であると強く感じました。被災した人を思いやる地域の結びつき、日頃の「地域の和」が為せる技だと思えます。防災を考える際に考慮される様々な防災グッズや組織づくりなどの大前提として、地域愛やそれに起因する地域の人々の結びつきがなければならぬのだと思います。

歌津中学校が、この度、モデルクラブとしての選定を受けたことをこの上ない機会であると考えています。モデルクラブの選定を機会に、

まず、いい人に出逢ってゆく。そして、「いい場所」に出向くこと。それが次の新しい機会を生かすことに繋がるから。また、柳生家の家訓に「永平寺の旅」を楽しくできた。広い境内の案内役は、剃髪をしたばかりの頭皮がまだ青々とした若い雲水だった。その雲水が説明の際、幾度か口にした言葉に「縁尋機妙」があった。その意は「天からいただいた御縁」というものは、さらに良い縁を尋ねて(求めて)次から次へと発展してゆく。その有り様は誠に妙なるものがある。いい人に交わっていると良い結

わなくてもすぐに協力して行動できるようになってほしいと考えています。そういう人づくりをすること。が、災害時に役に立つ地域のチームワークを形成するのだと考えます。

このように思い、6月4、5日の2日間の指導者研修会に参加させていただき、大変有意義な時間を過ごさせていただきました。中でも意見交換会で多くの諸先輩方の実践を伺うことができ、大変参考になりました。この中で、私は東京

都の資格制度について大変興味をもちました。少年消防クラブのような活動を学校単位で行う際に問題となるのは、モデルクラブの選定が終了したり、熱心な教員が転任したりすることなどによって活動が盛衰するということがあるという話を聞いたことがあります。このようなことにならないように、継続性をもち、校内で独自に資格制度のような仕組みを作って生徒たちに提示し、生徒の興味や関心に応じて、選択的に学べる工夫をしていきた

て、本校の少年消防クラブの活動が、人と人をつないで、この地域に継続的に根ざすように頑張っていきたいと考えています。

夕方7時過ぎに、山手にある地区の方々がおにぎりを届けてくださいました。ただの塩おにぎりでしたが、この世で最高のおにぎりでした。また、地域の建築業者の方が、一畳ほどの断熱材を大量に届けてくださり、生徒たちはそれに横になることで寒さをしのぐことが出来ました。

みんな、自分の命は自分で守る、自分たちのことは、自分たちで何とかしなければならぬということを中心に、なかなかに、自ら水の確保に動きたいと申し出る生徒があったり、おにぎりが届くたびに率先して配給を手伝う生徒がいたりしました。みんなが力を合わせて難局を乗り越えなければならぬという状況でした。

先日、88歳になる母を連れ立って、1泊2日の「永平寺の旅」を楽しんできた。広い境内の案内役は、剃髪をしたばかりの頭皮がまだ青々とした若い雲水だった。その雲水が説明の際、幾度か口にした言葉に「縁尋機妙」があった。その意は「天からいただいた御縁」というものは、さらに良い縁を尋ねて(求めて)次から次へと発展してゆく。その有り様は誠に妙なるものがある。いい人に交わっていると良い結

果に恵まれる。」とのこと。また、柳生家の家訓に「永平寺の旅」があることも思い出す。「小才、縁に出逢って、その縁に気づかず。中才、縁に気づき、その縁を生かさ

る。まず、いい人に出逢ってゆく。そして、「いい場所」に出向くこと。それが次の新しい機会を生かすことに繋がるから。また、柳生家の家訓に「永平寺の旅」を楽しくできた。広い境内の案内役は、剃髪をしたばかりの頭皮がまだ青々とした若い雲水だった。その雲水が説明の際、幾度か口にした言葉に「縁尋機妙」があった。その意は「天からいただいた御縁」というものは、さらに良い縁を尋ねて(求めて)次から次へと発展してゆく。その有り様は誠に妙なるものがある。いい人に交わっていると良い結

に垣間見られた。それも、ごく自然の体で、本当に「いい御縁が広がっている」と実感させられた。「地元の子供たちを育てたい」、「地域に役立つ人材になりたい」といった各クラブの指導者たちの熱い思いや使命感が伝わってくる。そんな心願を懐いた仲間がこの指導者研修会には溢れんばかりであった。

私自身、本研修会にオブザーバーとして参加させていただき、素晴らしい指導者の皆さんとの新鮮な御縁をいただいた。厚く感謝申し上げます。また、各クラブの益々の発展を祈ってやまない。

鈴木 幸平

少年消防クラブ活性化推進会議専門委員 (静岡県立清水東高等学校校長)

縁尋機妙

鈴木 幸平

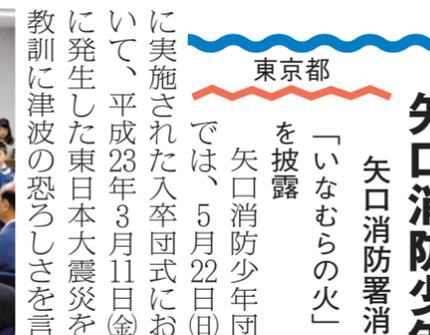
少年消防クラブ活性化推進会議専門委員 (静岡県立清水東高等学校校長)

日本堤消防少年団

団長 加藤悦孝

矢口消防少年団

「いなむらの火」を披露



少年消防クラブの活動

（団長・小林孝一）は有明に昨年できたばかりの「そなエリア東京」に行ってきました。震災時に備える場所（エリア）から、「そなエリア」と名づけられている防災体験学習施設。なかでも、東京直下72hツアーは、マグニチュード7・3、最大震度6強の首都直下型地震の発災から避難までをシミュレーションした「防災クイズ」に答えながら、生き抜く知恵を学ぶ防災体験学習ツアーで、団員達は窓ガラスが割れているコンビニや横転している乗用車の前などで出題される10の問題に手際良く答え早く避難し地震の備えに自信を持ったようでした。DSを使いこなせないのは大人ばかりで、こればかり

東京都
西東京消防少年団
西東京消防署防災安全係 菊地明美
DSで地震の備えに自信！
6月12日(日)、西東京消防少年団



（3面から続き）
に放水成功。会場の来賓からは「中学生も立派に地域



富山県
富山市立城山中学校少年消防クラブ
城山中学校教諭 豊島寿郎
城山中学校少年消防クラブでは、2年生3名が『社会に学ぶ「14歳の挑戦」』事業の一環として、婦中消防署で5日間職場体験活動をしてきました。職場体験活動では、体



力養成に始まり、小型動力ポンプを使った揚水作業体験、ホース延長訓練、放水訓練、心肺蘇生法等を教えるもらいました。生徒の感想の中に「ホース延長訓練が心に残りました。始めはホースがカーブしていっ

は頭をかくしかならない状態でした。「11日の地震を思い出して怖かったけれど、今度は家族で来てみたいで

「東北の被災地に向けてメッセージカードを書いたよ」と目を輝かせている団員の姿もありました。

防災の担い手として活躍できますね」、また、消防団員からは「後輩として頼もしいですね」との声が聞かれ、消防少年団員らは「将来は消防団員としてこの場に出場したいです」と語っていました。

空高く伸びるスカイツリーと、成長途上の消防少年団員の姿が重なり、将来の地域の防災リーダーとしての期待が高まる演技披露となりました。



お知らせ
日本防火協会理事長に吉田哲氏が就任しました。（7月11日付）

て、うまくできなかったけれど、何回か繰り返し返すうちに、だんだんまっすぐいくようになりました」「毎日やった体力養成はとても辛かったけれど、体を鍛えないと消防署の人はいざというときに力が発揮できないと思うので、大切だと改めて感じました」などがありました。

職場体験活動が終わり、2週間後の避難訓練で、全校生徒の前で3名がホース延長訓練と放水訓練を行いました。消防署の方に教えていただいた通り、きびきびと行動し、大きな声で訓練を行うことができました。また、男女20名でバケツリレーをしながら消火訓練を行いました。最初はなかなか上手にバケツリレーをすることができませんでしたが、隣の人の距離を考えた、向きを交互に変えたりすることで、最後はスムーズにバケツリレーをすることができました。

火災の避難訓練では毎年、他にも煙中体験や、消火器を使って初期消火体験を実施しています。全校生徒353名が全員で活動することは難しいですが、様々な体験活動を行ったり、見たりすることで、防災意識が高まることを実感しました。

宝くじは、地方自治体の公共事業等に幅広く使われています。

NEW!
ワクワク、続々。

あなたに夢を。街に元気を。

クーちゃん 宝くじ

宝くじの収益金は、
病院や検診車、図書館や動物園、
災害に強い街づくり、
緑あふれる公園、美術館など、
皆様の暮らしに役立てられています。

財団法人 日本宝くじ協会